

【仕舞 鞍馬天狗】

鞍馬山の天狗が牛若丸に兵法を伝授し、平家討伐に向けて守護することを約束する。

【仕舞 山姥】

深山に住む大自然の象徴ともいべき山姥が、六道を輪廻するかのよう四季折々の山を廻り、やがて消え去る。哲学的であると同時に舞踊敵魅力の満ちた作品の終曲を舞う。

【仕舞 清経】

源氏に追われ神にも見放された平家一門の行く末に絶望した清経。戦乱の恐怖の中で精神的に追い詰められ、ついに海底へと身を投げた清経の心情を切々と描いた圧巻の舞。

【狂言 伊文字】

清水観音の引き合わせで主人の妻となるべき女性が残した和歌を、途中までしか覚えていない太郎冠者。歌に女の住所が詠み込まれているので、主人とともに歌関をつくり、通りかぎりの男に歌の続きを推理させるが……。国の名、里の名を謡に合わせて推理してゆく楽しい作品。女性と通行人の二役をシテ（主人公）の役者が演じる。

【能 葵】

先の皇太子妃（夫が生きていれば皇后になっていた）六条御息所は、年下の光源氏と契るが、いつしか源氏の足は遠のき、寂しく辛い毎日を送る。葵祭の行列に源氏の姿を眺めにお忍びで出かけた際、源氏の正妻葵上の一行により車は壊され片隅へと追いやられるという屈辱を受ける。プライドの高さゆえに嫉妬心は内に籠もり、生き霊となって懐妊中の葵上を苦しめる。舞台は葵土の実家左大臣邸。照日巫女に呼び出された御息所の生き霊は、尽きせぬ怨みを告白し、葵上を打ち、連れ去ろうとする。比叡山の横川の小聖が一心に祈ると、鬼となった御息所の怨霊が現れるが、祈り伏せられ成仏する。

「源氏物語」をベースに、現代人にも共通する嫉妬と絶望を描いた名作。葵上を舞台に置かれた小袖に象徴化することで、六条御息所の情念にスポットをあてて描く。前場の終盤にある枕ノ段は御息所の執心と孤独な心理を見事に描く。今回は替之型の小書（特殊演出）で見せ場の型が変化する。後場は鬼女となった御息所とエクソシスト小聖の手に汗握る闘い。替装束の小書により、凄まじさの中にも御息所の高貴さを表現する。